



【件名】心を撮る職人

彼女へのお土産に写真集を買ったファンの方が、「プロポーズしました」と報告に来てくださるなんて素敵ですね。私も心に残っているプレゼントがあります。私の誕生日にサーフボード職人が贈ってくれたミニチュアのサーフボードです。その職人は去年完成した映画『珈琲とエンピツ』の主人公、太田辰郎さん。太田さんは、20年間勤めていた会社を辞め、長年の夢だったサーフショップをオープンしました。お店には自分が作ったボードのほかにハワイアン雑貨も並べて、土日になると、お店はサーファーやカップル、家族連れのお客さんでにぎわっています。

ろう者がサーフショップを経営していると初めて聞いたとき、どうやってお客さんと話すの？ と真っ先に疑問が浮かびました。そして、太田さんのお店に行ってみました。すると、手話や福祉とまったく無縁の茶髪兄ちゃんが身振り手振りで太田さんと楽しそうに話していました。まるで、英語の苦手な日本人と日本語のわからないアメリカ人が身振り手振りで会話をしているようで、とても新鮮でした。

太田さんとお客さんのやりとりを撮りたい！ と思った私は毎月お店に通いました。カメラをまわしている間、私はあることに気づきました。お客さんは太田さんを「生活に苦労している聞こえない人」として見ていないのです。アロハシャツを着たビッグスマイルの太田さんとして見ています。そういう関係っていいなあとうれしくなりました。お客さんのほとんどは手話を知りません。身振りと筆談で話しています。ろう者を助けるために手話を覚えようという気持ちよりうれしいです。伝えたいという思いが全身から伝わるから。

太田さんが作ってくれたミニチュアのボードには「心を撮る職人」と書かれています。「僕はボードを作る職人。今村くんは心を撮る職人。いい映画を撮ってほしい」とプレゼントしてくれたのです。ミニチュアボードを見てあらためて思いました。私は心を撮る職人になろうと。

いまむらあやこ



メールで会えたら

映像作家・今村彩子

海洋写真家・井上慎也
(うみまる)



【件名】Re：心を撮る職人

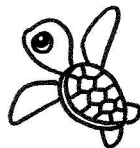
心を撮る職人、いいですね。太田さんはきっと、心に正直に生きている人なんでしょうね。僕も、自分の心に正直に生きたいと、いつも思っています。

自分たちは、海の中では「中性浮力」といって、浮きも沈みもしない状態を保ってどこにも手足を触れずに撮影しています。それは、何もいらないように見える岩の上にもサンゴの赤ちゃんや小さなホヤなどがいて、不用意に手をつくると、そんな生きものたちを傷つけてしまうかもしれないからです。

中性浮力で撮影しはじめた14年前、水中撮影といえば両ひじ両ひざを海底につけて、しっかり体を固定して撮影するのがあたりまえでした。でも、何気ない海底にも小さな生きものたちが一生懸命生きていくと気付いたので、不安定でもどこにも触れずに撮影しようと思ったのです。ダイバー仲間からは「現実的じゃない」と言われましたが、心に従った結果でした。

今では中性浮力で自由自在に撮影できます。手をつく場所もないくらいサンゴがびっしり生えているところでも、サンゴに触れずにいろんな角度から撮影できます。魚がちょっと警戒していると思ったら、そのままの体勢ですと後ろに下がって魚が安心するまで待って撮影することもできます。何より、中性浮力でのダイビングは海に抱きこめてもらっているようで気持ちいいんですよ。この撮影法をもっと広めたいと思って、2年ほど前から「うみまる流 海にやさしい水中写真術」というスライドトークショーもやっています。

自分の心って、すぐに見失うんですね。忙しかったり、慣れが出たり、人のことをうらやましいと思ったりしたら注意しないとイケない。「四十にして惑わず」と言いますが、僕は40代になってから、30代のころより迷っているような気がします。じっくり自分の心と対話して、心に正直に生きていきたいなと思います。



いのうえしんや・ウミガメのイラストも